

Folkloreが聴こえる

—フィクションとしての地質屋の物語—

Ats.N

♩ = 76

とつぜんかれが ポリビアへゆくと いいだしたときに— もちろんまにうけるものなど なか
ったけれど— ふと ぼくは どうしてか アフリカ のしゅうちょうに なっ てしまったかれを おも
い えがいてた じつは アンデスの やまおくの こととしたのは ラパス からの えはがきが とど
いた はるさきで まっ くらで きたないかおの ちしつや が チョリータに おそわっ
た えがおでうつつ— いた — カンポで は — いしゃも くすりもなく て ひと
も リヤマもしぜんとくらして るけれど— ジャガイモ と — むぎと ほしくさ のベッドがあれば いき
ることのよろこび— かんじられるんです ほんとうの しあわせっていったい
なんなんでしょう か— へいわというなのまちから— とど いたことばたちが— はい
きガスとそうおんの あふれて る このまちで ぼく の まわりにこだ ま— した — こ
の — つかい りりいろ の そらを だれ かに みせ たくて —

突然彼がBoliviaへ行くと言い出した時に
もちろん真に受ける者などなかったけれど
ふと僕はどうしてかAfricaの酋長に
なってしまった彼を思い描いてた

実はAndesの山奥のことと知ったのは
La Pazからの絵葉書が届いた春先で
真っ黒で汚い顔の地質屋がcholitaに
教わった笑顔で写っていた

「^{campo}田舎では医者も薬もなくて
人もllamaも自然と暮らしてるけれど
ジャガイモと麦と干し草の^{ベッド}寝床があれば
生きることの喜び感じられるんです」

「本当の幸せっていったい何なんですか
^{平和}La Pazという名の町から届いた言葉達が
排気ガスと騒音の溢れてるこの街で
僕の周りに^{こだま}反響した

「この深い瑠璃色の空を誰かに見せたくて」

「電気は疎か水さえもないようなところにも
日本製のラジカセが元気に鳴っています
僕が生まれたその国は素晴らしい国ですと
誇らしげに口に出すことができません」

「酒場のquenaが歌ってるfolkloreに合わせて
踊ることに抵抗はなくなったけれど
やはり僕は少しかAndesに気触れてる
変な外人のままでした」

「Huayna Potosiの氷河を浮かべて
オンザロックを飲み干した刹那の
何億年も前の空気が弾ける音に
忘れていた淋しさ起き出してきます」

結局彼は白亜紀の化石達を連れて
生まれ育ったこの街へ帰ってきたけれど
なんとなく居心地が悪そうに見えたのは
空気が濃いせいばかりでしょうか

「あの深い瑠璃色の空にもう一度会いたくて」

再び彼がBoliviaへ行く日が来るなんて
もちろん僕達にだって予想できたけれど
たった一年後のしかも二人連れだなんて
心配するほどでもなかったようです

albinoの^{rat}鼠が友達で
「男なんて面倒」と言ってた彼女
地質屋の何処が気に入ってしまったのか
気が付いたらいつでも一緒にいました

ほんの少し羨む僕達に見送られて
薄くて美味しい空気を求めて旅立った
あの変な外人の二人をAndesが
folkloreで迎えてくれるのでしょう

「あの深い瑠璃色の空を君に見せたくて」

「この蒼い^{ほし}惑星の未来君と見てたくて」